

吉田昌子先生をお送りするにあたって

産業社会学部長 篠田 武司

吉田先生の退職・最終講義にあたり、学部を代表して、先生のご紹介をさせていただき、先生への贈る言葉とさせていただきます。

先生は、1935年、京都市でお生まれになりました。高校は京都女子高等学校を卒業されました。すぐに立命館大学文学部文学科英米文学専攻に入学され、卒業後は大学院にお進みになりました。その後、大阪市立都島中学校で教諭生活をおくれたあと、文学部の助手に赴任され、今日まで34年間、立命館大学の教学に多大な貢献をされてきました。

さて、先生は、ご存知のように英文学の学者でございます。そして、英文学者として先生はこよなくイギリスを愛されています。イギリスの豊かな自然を愛されています。一度はイギリスにいかれた方は感激いたしますように、本当にイギリスは豊かな自然を持っていますが、こよなく先生はこうしたイギリスの自然を愛されています。そしてまた、イギリスの自然が生み出したイギリスの豊穡な小説を、そして人の魂に訴えてくる詩・ポエムを愛しておられます。そして、なによりもそうした自然を育み、文学を育みいとしんできた、感性豊かなイギリスの人々を愛しておられます。

先生は英文学者ですが、またイギリスのナショナル・トラストにも深い造詣をもたれています。イギリスの人たちは自然の中でこそ、人が人を慈しみ、育っていくことを心から良く知っている国民だと思いますが、ナショナル・トラストの運動が大きな力を持っていることは、したがって、理由あることだと思います。イギリスを愛されている英文学者の先生が、ナショナル・トラストにも関心を待たれるのは、このようなわけで誠に自然の流れでもあると思います。

このようにイギリスをこよなく愛する先生が、退職にあたる今年度、友人の先生達と、素敵なお土産を私達に残していかれることになりました。『英国読本: 紅茶の時間に - 作家と詩人の愛した町や村 - 』と題されたサリー・ヴァーロウの翻訳本です。イギリスに興味がある方、是非一度読んでお読みください。多くのきれいな写真とともに翻訳に苦労されたあとが垣間見える美しい文章が現れてきます。3500円です。安いものです。蛇足ですが、私などにはこんなに写真がのって、こんなにいいペーパーを使って、なんでこんなに安くできるのだろう、なんて思うほどです。ただし、一気に読むにはしんどい。したがって、「今日はケンブリッジのところを読もう」なんて決めながら読んでいますが、いまでは夜寝る前の愛読書の一つになっております。この本は心を穏やかにさせてくれます。ぜひ、一度読んでいただきたいと思います。また、これがイギリスの真髄であり、こういう心に触れながら先生は育ち、講義をされてきたのでしょう。学生の皆さんは、先生が何を

伝えようとしてきたのかの一端に触れることになることでしょう。

さて、「あとがき」で、先生はこう書いておられます。「近年われわれは、見えないけれど人間にまつわる想念の世界があることを忘れはじめてるように思われる。そのために、人びとは互いの気持ちや心の願いを共有することを知らず、自然の声を聴けなくなってしまっているのではないかと。この「あとがき」の言葉のなかには、また先生の様々な思いが込められています。そして、そんな思いを何とかしようとこのご本を翻訳されたといいます。先生のいまに生きる人々への、いやわれわれへの願い、静かな叫びがきこえてくるようです。先生は、穏やかな方です。しかし、情熱の人です。そんな先生がよく表れているメッセージだと思います。肝に銘じたいと思います。

ただし、私、この「想念の世界」といわれた言葉に興味を引かれたのですが、「想念」を英語ではこの場合どう訳すのだろう。イマジネーション、イメージ、エモーション、アイデア……、先生はそして、どう訳されるのだろう、興味があります。皆さんも考えてみてください。様々な思いを込めた訳があるかと思います。先生は、英語の講義はスキルを単に教えることではない、それが何を訴えるのか、何を伝えようとしているのか、それを読み解く感性と知性を育む手助けをすること、それが大切なのだと一貫して訴えられてきました。そんな思いもまた込められたメッセージかと思います。

先生はまた、教師として優れた方でした。今日、先生のことで何をご紹介しましょうか、とお尋ねしたら。私のとりえは、「学生が好きだ」ということ、それだけは紹介しといて、ということでした。紹介させていただきます。ちょっとアレンジします。

先生は「学生をイギリス以上に愛されていました」。私が講義を終え、廊下などを歩いておると、先生はいつも学生に取り囲まれてお話をされていました。いいな、と思います。私などには学生が寄ってきてくれません。多分、先生の何かが学生をひきつけるのでしょう。見習わなければと思います。

先生は、来年度からは、新天地（京都創成大学）で新たな人生の出発を始められますが、引き続きお元気で頑張ってくださいたいと存じます。また、34年間、立命でお力をいただき本当にありがとうございました。心からお礼を申し上げます。先生が去られること、大変寂しく思いますが、これからも引き続きわれわれ産業社会学部の教員、あいは学生をよろしく見守っていただきたいと存じます。

どうもありがとうございました。挨拶とさせていただきます。

〔最終講義〕**第一部 講 義****産業社会学部英語教育史概説****－ 産業社会学部英語教育について －****第二部 公開授業****英語 III Paragraph Writing F-クラス**

吉田 昌子*

第一部 講 義**はじめに**

わたくしの場合、最終講義といっても、もともとが英語の授業なので講義にはなりません。わたくしには「外国文学」の講義がありましたので、もしその講義を担当している時でしたなら、それで最終の講義ができたかと思います。今年度はその機会がありませんので、わたくしの場合は日頃の英語の授業をお見せするほかありません。いわば公開授業をするといったことになります。しかし、それによって、わたくしがこれまで行なってきた授業の一端なりと窺い知っていただけのではないかと思っております。

とは申しましても、初めからおしまいまでただ授業を観ていただくだけというのも最終講義らしくない気がいたしますので、一部・二部形式で、一部を講演のようにいたしました。タイトルは、いかにも学問らしく「産業社会学部英語教育史概説」としましたが、要するにサブタイトルにありますように、「産業社会学部での英語教育について」でありまして、産業社会学部でどのように英語教育をしてきたかを、年月を追ってお話しようと思っているわけです。しかし、90分のうちの3分の1程度の時間でとてもお話ししきれるものではありません。ごく概略的な話になるだろうと思われませんがお許しいただきたいと思います。

* 立命館大学産業社会学部教授、2001年4月1日より立命館大学名誉教授

学部創設の翌年から取り組まれた「統一テキスト」

産業社会学部の英語教育は、学部創設（1965）の翌年から、学部教学に関連する内容を盛り込んだ自主編成のテキスト、いわゆる「統一テキスト」 - 当時は「共通テキスト」と呼んだり、「統一教材」とかしていました - が作成されていました。ここにありますのは、その第一冊目です。なぜか1975年度のみだけがありませんが、しかし、最後の1991年度のみであります。教室の後に置いておきますので、どうぞあとでもご覧になってください。「注（Notes）」もわたしたちで作成しましたので、それもあります。

お手元にお配りした資料は、「統一テキスト」第1号からの内容のリストです（37頁～44頁に資料Iとして記載）。それと、もうひとつは、「はしがき」の一部をコピーしたものです（45頁～49頁に資料IIとして記載）。資料をごらんくださってお分りのように、最初の「共通テキスト」は、1967年に作られたことになっています。学部創設（1965）の翌年から、「はしがき」には何度も書かれています。実際にテキストが使われたのは1967年度からです。「翌年」というのはその年から作成の準備にとりかかったということです。最初は雄渾社という出版社から、テキストの中に注もいった、いわゆる大学テキストの形で出されていました。この頃わたしは居りませんでした。わたしが産業社会学部に就任したのは1971年度です。テキストの内容一覧を見ていただくとわかりますが、雄渾社からの出版は1972年度まででした。とくに、1971年度と1972年度には、それまでのテキストに収録されていた教材の中からよかったと思われるもの、つまり、教室で評判のよかったものを再度とりあげて作成したExtracts版です。これは多分、わたしがまだ学部の教育に慣れていないことへのご配慮だったのだらうと思っています。わたしが、実際に参加するようになったのは1973年度からです。この時には雄渾社をはなれています。その理由は、治まりかけてはいましたが、その頃、激しくしんどい学園紛争のあった時でしたので、おそらくそのことが影響したのではないかと思います。あるいは、＜自主編成＞本来の趣旨を生かすために、完全な手作りになろうとしたのかもしれませんが。手作りというのは、担当者が教材をもちよって、印刷は印刷屋に頼むわけですが、出版社から発行してもらわない形です。産業社会学部は、そのころから集める素材は、学部の教学にふさわしい、社会学的なもの、あるいは、社会問題をテーマにした内容のものを持ち寄りました。それを毎年毎年つくったわけです。たいへん薄っぺらなものなのですが、一年間使いました。それと、大きな声ではいえないのですが、その一冊を1回生と2回生に使いました。どうして同じものが1回生と2回生に使えるのかと思われるでしょうが、それはそれで扱い方に工夫がありました。

このようにわたしが加わるようになった1973年にさきがけて、「はしがき」を書いてみてごらんといわれたのが、お手元にあります資料の2枚目（46頁の資料IIを参照）です。1972年度版に、まだ内容がよく分からなかったのですが、だいたいこんなものだらうと考えて書いたものです。最後のほうに、“IS”が「心」と訂正してありますが、校正ぬきでいきなり印刷されてきたので、読み間違いが、そのまま印刷されたのです。当時は産業社会学部の英語名称の略は、“IS（Industrial

Society)”だったので、読みにくかった「心」が、IとSに見えたのだらうと思われま

次に「内容」の一覧表（37頁の資料I）を見てください。産業社会学部は、現代社会の諸問題を取り上げること

を教学の方針としていましたので、わたしはそのことを考えて、民主主義の理念をかかげて第二次大戦中のドイツ・ナチスに反論した、イギリスの作家 - 会場に、イギリス人のホザック先生がおられる前でイギリスのことをよく知っているという顔をするのは恥ずかしいのですが - E.M.フォスターの文章を提出しました。翌年には、自分の研究対象である D.H. ロレンスという作家の、近代機械文明を批判し、メキシコ原住民の自然のなかで自然の魂に触れる生活を称賛している短いエッセイを提出しました。しかし、すぐさま、D.H.ロレンスは、産業社会学部の教材として不適切との指摘をうけ、以後はいっさい使いませんでした。その後とりあげるものは、アンネの書いた日記からとか、原爆詩人について書かれたものとか、宮城まりこのねむの木学園に関する話の英語版とか、いわば、「反戦」「平和」「障害者問題」などといわれる題材に決めました。その中でもわたし自身がたいへん気に入っているのは、Charles Chaplin の映画 “The Great Dictator” に出てくる演説文です。映画のなかで、ヒットラーにそっくりで、ヒットラー総督に間違えられた町の床屋が、間違えられたまま、軍服を着せられて多勢の兵士の前でとうとう戦意高揚のための演説をしなければならぬ羽目に陥るシーンがあります。最初はおずおずと始めるのですが、やがて平和と愛の世界の実現を訴えはじめます。床屋である自分の恋人ハンナに呼びかけながら、「いまの戦争をやめて、平和と愛の世界を築こう」と。そして最後には、聞き入る兵士たちのやんやの喝采を浴びます。チャプリンの肉声の演説です。この映画が作られたのは1937年、第二次大戦前ですが、ヒットラー全盛の時代でした。映画のなかでは、学のない、一介の市民にすぎない床屋の演説だと、笑って見過ごされるような状況ですが、実は、チャップリンは、映画を通して全世界の人たちにほんとうに呼びかけていたのです。権勢をほしいままにしていたヒットラーの時代であったにもかかわらずです。他にも感動的で、とても意義深い教材がいくつもありましたが、それは、一覧表で見つけていただくことにして、わたし自身が提供してきた、教材の一端をわかっただく程度に止めたいと思います。

24年間続いた「統一テキスト」、手づくりテキストの20年

産業社会学部では、このように手づくりのテキストを、わたしたち英語教員は、20年間ずーと使ってきたわけ

です。考えてみますと20年もの間、内容はかわってききましたが、形式というかやり方はまったく変わらずにきたということはたいへんな驚きです。最近、外国語教育は目まぐるしく変わっています。産社の「統一テキスト」がいろいろの事情から成り立たなくなった1991年から、2000年の今日までの9年間、いえ、いま2001年とすると10年間に、外国語教育は目まぐるしく改革されてきました。外国語教育が変わり始めたということでは、1987年という年が<かなめ>になります。資料IIにとりあげていますように、1984年という年も注目しなければなりません。

1988年のことですが、立命館大学には、この年まで外国語科連絡協議会という全学の外国語担当

者の先生たちが、学部を越えて集まり、立命館全体の外国語教育について、案を立て、協議して、教育の向上をはかるという大きな組織がありました。それが、この年1988年に、発展的解消といいますが、無くなったのです。

外国語科連絡協議会（以後 外連協と略）のこともう少しふれますと、わたしは、たまたま立命館大学の百年史にかかわったことから、外連協が設立された年や事情がよく分かるわけですが、外連協ができたのが、1958年でした。戦後の学制改革で、一般教育が大学教育に取り入れられるようになり、外国語教育への取り組みがもとめられました。当時の記録をみますと、立命館大学では、取り組みが遅れ、文部省から注意されてあたふたしているようすが、ありありと窺えます。そのような状況のなかで、早くも外連協が設立されています。こうした制度を背景にして、産業社会学部の英語教育もあったわけですが、産社は「統一テキスト」による独自の英語教育を行なってきた、20年間（正確には24年間）も続けてきたのです。90年代に入り、外国語教育が目まぐるしく変わってきたことは先に述べたとおりです。94年度の改革、98年度の改革と、4年ごとに大きな改革が行なわれて急速な変化を遂げている昨今のスピードぶりに比べると、ひとつの試みが20年以上にわたって続けられてきたことは、ほんとうに驚きです。

「統一テキスト」時代の状況変化と「統一テキスト」の終焉

20年以上続いた間には、時代・社会の変容がありました。90年代を強調しましたが、80年代に入った時点で変化が現れました。その頃から「学生の様変わり」という声が聞こえはじめました。しかし、戦後の学制改革による外国語教育と産業社会学部の英語教育の歴史のなかで、1987年の変化は大きなものだったといえます。産業社会学部ではそれでも、1991年まで「統一テキスト」を続けてきましたが、その時になって、いよいよもう駄目だと手を挙げたのです。見方を変えれば、「それでも1991年までもってきたのだ」といえるのかもしれませんが、そこで、そうとう頑張ってきた「統一テキスト」なのですが、1991年には、とうとう廃めざるをえなくなりました。では、どのような状況の変化を蒙って、ついに廃めざるをえなくなったのでしょうか。

「統一テキスト」は、教員が自主的に編纂したものだと言ってきましたが、けっして、教員だけで一方的に作成してきたものではありませんでした。わたしたちは、学年が終わるごとに、教材のひとつひとつについて、＜関心度＞、＜難易度＞、＜授業方法＞などのアンケートを学生からとりました。それを参考にしながら、次年度の教材選びをおこないました。ときどき Extract集を作成できたのも、アンケートとその結果の綿密な分析によって、どの教材が学生に好評なのかがわかったからです。さらなる学力の向上を願う試みとして夏期課題を出しました。夏休み中にまとまった分量の英語の物語を読んでレポートを提出するものです。授業方法にもさまざまな工夫をしましたが、「辞書をひいて、意味をしらべて、読んで訳をするだけなら高校の授業とおなじではないか」という声が早くも1982年のアンケートに出てきています。それでも、わたしたちは、内容に意義があるのだとやりつづけました。しかし、それもだんだん難しくなってきました。80年代に入ると、漫

画世代というのでしょうか、劇画の時代というのでしょうか、活字だけではいわゆる「授業がもたない」状況がでてきました。80年度には、イラストのある話とか、写真の掲載が始まっています。1981年には映画を用いるようになりました。そして、上映する映画のシナリオもしくは原作の一部を教材にとりいれました。教材一覧表の1981年度のところにその第一号として、*Johnny Got His Gun* が採択されています。後には「ロッキー」やダスティ・ホフマン主演の自閉症の人物を扱った「レインマン」という映画も取り上げました。いずれも、産業社会学部らしく、その時代の社会的問題となった作品です。「はしがき」を引用した資料IIを見ていただきますと、1984年度には、新聞や雑誌からの引用やクイズ・歌まで盛り込んで授業への興味づけをおこなっています。会場にいらっしゃる池内先生は、この時すでに学部にはいらっしやたので、よくご存知のことと思います。

しかしなんといっても、1987年度の変化は大きかったといえます。自分のことを言って恐縮ですが、この年、わたしは、外連協委員長という大きな役割を担いました。この時、学生の興味・関心が多様化する状況が生まれてきました。2回生の英語クラスを選択登録制にする案が実施に移されました。2回生の英語は、学生の希望にあわせて、「時事英語」、「英会話」、「文学」などにわけ、その中から学生がクラスを選んでいく方式でした。まず、2回生には「統一テキスト」は使えなくなりました。1991年度を最後に、ついに「統一テキスト」が廃止になったのは、1回生のクラスが「分割クラス」になったことによります。この頃から、外国人教員が非常にたくさん採用されました。そして、ひとつのクラスを、外国人と日本人で担当する方法が取り入れられました。つまり、50人定員のクラスを25名ずつにわけ、一方の25名を外国人、もう一方の25名を日本人が担当し、後期になると外国人が担当していた25名を日本人が、日本人の25名は外国人になる、という方法でした。「一覧表」の資料の最後のほうになりますが、90年度と91年度のテキストは、前期と後期に別れています。これはひとつのクラスを2分割した（ここから「分割クラス方式」と称しました）からです。この場合、25名ずつに分かれるといっても、同じクラスの学生ですから、テキストを同じものにしなければなりません。まったく同じテキストを前期も後期も使うとなると、当時は筆記試験の時代でしたから、まったく同じ内容のものでは困るわけです。前期と後期でわずかに内容を変えたり、テスト問題も苦労して考えました。工夫を重ねてなおも使おうとしたのですが、そのうちに前期の学生が、使用済みのテキストを、後期の学生に譲るとか安く売るようになりました。そうするとテキスト作成費の採算が合わなくなってくるという結果もでてきて、とうとう「統一テキスト」の継続が難しくなってきました。前述したように2回生の英語クラスが、学生の希望に合わせたテーマごとのクラスにわけられ、選択登録制になって「統一テキスト」が使えなくなっていたことも廃止に拍車をかけることになりました。

その上、決定的な悲しい出来事が起こりました。「統一テキスト」づくりの中心的存在だった岡節三先生が、1990年の秋に亡くなられたのです。もしずーっといらっしやたならば、新しい状況に応じた「統一テキスト」を考えだしてくださり、それをみんなで議論して、また続けていけたかもしれないと思うのですが、駄目になりました。

時間もあまりありません。そろそろ、話を締め括らなければならないのですが、後は、うしろに

置いてあります「統一テキスト」をご覧ください。ご覧になると、きっと＜なんてチャチな＞と思われるでしょう。でも、当時は一生懸命勉強しました。英語を学んでもらうことがたいへんだったのです。産業社会学部には、「英語はいらない」という雰囲気がありました。実際、「なんでおれたちに英語がいるのか」という声がありました。わたしの目の前までやってきて、「僕たち産社の学生には英語はいらんとします」と言うのです。「でも、あなたたち大学に来ているひとたちが英語を勉強して、英語の文献を日本語にできる力をつけて、英語を学ぶ機会のない人たちにも解るようにしてあげる役目があるのよ。でなければ、誰がしてあげるの」と言いますと、「自分たちが訳さなくても、翻訳本はいくらでもありますよ」と返ってくる状況でした。

その時のことを思うと、いまは、外国人の先生のほうが多いくらいたくさんおられます。今日ご参加の先生で覚えていらっしゃる方がいると思うのですが、はじめて外国人の先生が来られたのは、1982年でした。バトラーさんを覚えていらっしゃいますか。あの時、全学でおひとりでした。ひとりで、英会話などを担当しておられました。その時代からすると、いまは、外国人の先生方がいっぱいおられますし、コンピュータによるCAIもあり、たいへんな変わりようです。わたしなど、もう随いていけなくて、すみません、すみません、と言わなければなりません。いま、退職になってよかった、という心境です。

話としては、とりとめのない、まとまりのないものになりました。途中、年代と内容の混乱もあり申し訳ありませんでしたが、これで、わたしの話の第一部を終わります。

注記：産業社会学部の「統一テキスト」の実践報告として、1997年に定年で退職になった須田稔名誉教授が、ご在職中に、外連協紀要『外国文学研究 - 外国語教育特集 - 』No. 72（立命館大学外国語科連絡協議会 1986）に書かれた「英語教育の10年 - 産業社会学部の苦闘の足跡 - 」という優れた論文があります。テキストの内容、課題の詳細、学生のレポートの提示、学生に対するアンケート結果の分析など、豊富なデータを駆使して、その当時までの「統一テキスト」の10年を詳細に報告なさっています。ご一読ください。

資料

The List of the English Textbooks Edited by the Teachers of English,
Faculty of Social Sciences, from 1967 to 1991

The 4th Priod, Friday, January 12, 2001

In the Room No. 31, Koshinkan

Yoshida Masako

VOICES OF THE OPPRESSED 1967 ~ 1972 (Published by YUKONSHA)

I [1967.2] S.KATAYAMA, S.OKA, M.SUDA, Y.TAKENAMI

はしがき	i
著者と作品紹介	ii ~ iv
1) E.Caldwell, <i>Wild Flowers</i>	1
2) <i>Letters from South Vietnam</i>	
From Father to Son	12
Letter from Ca Mau	19
3) Mai Ngu, <i>The Cradles</i>	37
4) J.Boggs, <i>Rabels with a Cause</i>	48
5) M.K.Gandhi, <i>Non-Violent Resistance</i>	66
Notes.....	79 ~ 101

II [1868.1] S.OKA, M.SUDA (S.KATAYAMA, Y.TAKENAMI, M.MIYAMOTO)

はしがき	i
著者と作品について	ii ~ iv
1) E.Caldwell, <i>We Are Looking at You, Agnes</i>	1
<i>Slow Death</i>	11
2) John Henrik Clarke, <i>The Boy Who Painted Christ Black</i>	24
3) John O.Killens, <i>God Bless America</i>	35
4) Julius K.Nyerere, ' <i>Ujamaa: ' The Basis of Africa Socialism</i>	44
5) Anna Louse Strong, <i>Fighters for Women's Rights</i>	61
Notes	79 ~ 93

III [1969.3] S.KATAYAMA, Y.TAKENAMI (S.OKA, M.SUDA, M.MIYAMOTO)

はしがき	
1) Bernard Malamud, <i>The Bill</i>	1

2) Bernard Malamud, <i>The German Refugee</i>	11
3) Excerpts from <i>Authors Take Sides on Vietnam</i> Herbert Read, Bertrand Russel, J.B.Priestley, R.Palme Dutt	30
4) Langston Hughes, <i>The Gun</i>	42
5) D.K.Chisiza, <i>The Outlook for Contemporary Africa</i>	52 ~ 74
Notes.....	1 ~ 24
IV [1970.3] S.OKA, M.MIYAMOTO (S.KATAYAMA, M.SUDA, Y.TAKENAMI)	
はしがき	
1) John Hudson Jones, <i>The Harlem Rat</i>	1
2) Cyprian Ekwensi, <i>Night of Freedom</i>	9
3) Ezekiel Mphahlele, <i>Down Second Avenue - Into the Slums -</i>	25
4) Eduardo Galeano, <i>With the Guerrillas in Guatemala</i>	35
5) Jawaharlal Nehru, <i>The Last Letter to Indira</i>	51
6) Martin Luther King, Jr., <i>Washington D.C. Aug. 28, 1963</i> - I Have a Dreams -	61
Notes	67 ~ 101
EXTRACTS FROM VOICES OF THE OPPRESSED I & II (Published by YUKONSHA)	
Extracts [1971.3] (S.OKA, S.KATAYAMA, M.SUDA, Y.TAKENAMI, M.MIYAMOTO)	
はしがき	
1) E.Caldwell, <i>Wild Flowers</i>	1
2) John Henrik Clarke, <i>The Boy Who Painted Christ Black</i>	12
3) Julius K. Nyerere, ' <i>Ujamaa : ' The Basis of African</i>	23 ~ 39
Notes	41 ~ 47
EXTRACTS FROM VOICES OF THE OPPRESSED III & IV (Published by YUKONSHA)	
Extracts [1972.2] (S.OKA, S.KATAYAMA, M.SUDA, M.MIYAMOTO, M.YOSHIDA)	
はしがき	
1) Bernard Malamud, <i>The German Refugee</i>	1
2) Langston Hughes, <i>The Gun</i>	20
3) Jawaharlal Nehru, <i>The Last Letter to Indira</i>	30
4)(Extra) Langston Hughes, <i>African Morning</i>	31 ~ 39
Notes.....	1 ~ 13
<Notes were separately printed hereafter>	

VOICES OF THE WORLD CONSCIENCE 1973 ~ 1976, 1978

I [1973.4] S.OKA, S.KATAYAMA, M.SUDA, M.MIYAMOTO, M.YOSHIDA

はしがき

- 1) J.Ngugi, *The Martyr* 1
- 2) C.Eatherly & G.Anders, *Extracts from Burning Conscience* 12
- 3) M.L.King, Jr., *Beyond Vietnam* 23
- 4) E.M.Forster, *Three Anti-Nazi Broadcasts* 31
- 5) R.W.Emerson, *John Brown* 44
- 6) K.Marx, *Reflections of a Youth on Choosing an Occupation* 48 ~ 53

II [1974.4] S.OKA, M.SUDA, M.YOSHIDA, M.MIYAMOTO, S.KATAYAMA

はしがき

- 1) I.B.Singer, *The Washwoman* 1
- 2) A.Bigelow, *Why I Am Sailing into the Pacific Bomb-Test Area* 8
- 3) D.H.Lawrence, *New Mexico* 17
- 4) A.La Guma, *The Exile* 29
- 5) T.Nelson, *The Duty to Resist* 45 ~ 53

III [1975.] S.OKA, S.KATAYAMA, M.SUDA, M.YOSHIDA, M.MIYAMOTO

- 1) J.Nehru, *Premier Nehru's Address to Japanese Students* 1
- 2) J.Eduards, *Liars Don't Qualify* 8
- 3) R.J.Lifton, *A-Bomb Poets* 17
- 4) I.P.Pavlov, *A Letter to the Youth* 29
- 5) J.T.Farrell, *Jim O'Neill* 44
- 6) P.Bahannan, *The Myth and the Fact* 48
- 7) J.Baez, *A Pacifist Singer Writes* 53

< From the notes, because the textbook was lost >

IV [1976.4] S.KATAYAMA, M.MIYAMOTO, S.OKA, M.SUDA, M.YOSHIDA

はしがき

- 1) Mardi Reeder Campion (Adapted by Jacqueline Klat Cooler)
The Voice of the Revolution 1
- 2) *Declaration of Indenpendence, 1776* 6
- 3) *The Voice of the American Indian* 11
- 4) Martin Luther King, Jr., *I Have a Dream* (Washington D.C. Aug. 28. 1963) 15
- 5) *Declaration of Independence of the Democratic Republic of Viet Nam* 21

- 6) Alex Quaison-Sackey, *The African Personality* 25
 7) Charles Chaplin, *Chaplin and The Great Dictator* 43 ~ 53

VOICES FOR THE HUMAN RIGHTS 1977

I [1977.4] M.MIYAMOTO, S.OKA, M.SUDA, M.YOSHIDA

はしがき

- 1) Rachel Carson, *Silent Spring* 1
 2) Paula Hankins, *Testimonial* 15
 3) Reyston Pike, *Mary Wollstonecraft and the Origins
 of the Women's Movement* 24
 4) Alex L Guma, *The Lemon Orchard* 46 ~ 51

EXTRACTS FROM VOICES OF THE WORLD CONSCIENCE I - IV 1978

Extracts [1978.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, M.SUDA, M.MIYAMOTO, M.YOSHIDA

はしがき

- 1) Charles Chaplin, *Chaplin and The Great Dictator* 1
 2) Isaac Bashevis Singer, *The Washwoman* 12
 3) Ivan Petrovich Pavlov, *A Letter to the Youth* 19
 4) Martin Luther King, Jr., *I Have a Dream* (Washington D.C.Aug. 28, 1963) 21
 5) Ngugi Wa Thiong'o, *The Martyr* 27
 6) Karl Marx, *Reflections of a Youth on Choosing an Occupation* 4 ~ 45

VOICES FOR THE HUMAN RIGHTS 1979 ~ 1982

II [1979.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, M.SUDA, M.MIYAMOTO, M.YOSHIDA

はしがき

- 1) Geoffrey Murray, *Mariko-Mother!* 1
 2) Edited by O. Nathan & H.Norden, *Einstein on Peace*..... 13
 3) Roger Mais, *Blackout* 23
 4) Sholom Aleichem, *The Pair* 28 ~ 46

III [1980.4] Y.IKEUCI, S.OKA, M.SUDA, M.MIYAMOTO, M.YOSHIDA

はしがき i ~ ii

- 1) *The Crow and the Fox* 1
 2) Wilson Mativo, *The Park Boy*..... 7
 3) Anne Frank, *The Diary of Anne Frank* 20
 4) *Why the Hill Is Red* 34

5) Rabindranath Tagore, <i>The Home-coming</i>	37
6) Martin Luther King, Jr., <i>I've been to the Mountaintop</i>	48
7) Bernard Malamud, <i>God's Wrath</i>	59 ~ 67

IV [1981.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, M.SUDA, M.MIYAMOTO, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) <i>The Columbus of Chelm - A Jewish Folktale in Poland -</i>	1
2) Rila Elway, <i>A Speech from What Women Want</i>	6
3) Robert and Michael Meeropol, <i>We Are Your Sons</i>	12
4) Sipho Sepamla, <i>Poems from South Africa</i>	26
A Child Dies	
A Lover's Diary	
In Search of Roots	
When I Lost Slum Life	
5) Dalton Trambo, <i>Johnny Got His Gun - Chapter XI - (Film)</i>	31 ~ 50

V [1982.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, T.KATO, M.SUDA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) Rachel Carson, <i>Silent Spring</i>	1
2) <i>How to Share Five Cakes - A Folktale of Sri Lanka -</i>	14
3) <i>The Story of the Betel and the Areca - A Folktale of Vietnam -</i>	20
4) Avery Corman, <i>Kramer vs. Kramer - Excerpts from the novel - (Film)</i>	25
5) Alex La Guma, <i>The Lemon Orchard</i>	45 ~ 50

VOICES OF THE HUMAN HEARTS 1983 ~ 1988

I [1983.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, T.KATO, M.SUDA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) Dick Gregory, <i>Not Poor, Just Broke</i>	1
2) Loyle Hairston, <i>U.S. Media: The Information Opiate</i>	6
3) <i>Princess Dragon - A Folktale of China -</i>	14
4) Howard Fast, <i>The Passion of Sacco and Vanzetti (Film)</i>	26
5) Tetsuko Kuroyanagi, <i>Totto-chan</i>	38
6) <i>Why the GLC Is Declaring London a Nuclear Free Zone</i>	49 ~ 50

II [1984.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, T.KATO, M.SUDA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
------------	--------

1) Manya and Eric De Leeuw, <i>Read Better, Read Faster</i>	1
2) Dee Brown, <i>Standing Bear Becomes a Person</i>	8
3) <i>Catastrophe by Computer</i>	25
4) Ishimure Michiko, <i>The Sixteen-year-old Prostitute</i>	27
5) Julia Sorel, <i>Rocky</i> (Based upon the screenplay by Sylvester Stallone)(Film)	40
6) <i>Japan's Mr. Highgrowth Tripped by Bribes</i>	55
7) <i>Disarmament</i>	57
8) <i>The Girl with the Large Eyes - A Folktale of Africa -</i>	71 ~ 74

III [1985.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, T.KATO, M.SUDA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ iii
1) Kittredge Cherry, <i>Television's Power Blinds Many Japanese</i>	1
2) Paule Marshall, <i>The Valley Between</i>	3
3) Yoko Ota Translated by Koichi Nakagawa, <i>Fireflies</i>	13
4) Michael Ross, <i>Land of the Setting Sun: Japan Grows Old</i>	25
5) Erich Maria Remarque, <i>All Quiet on the Western Front</i> (Film).....	27
6) Jill Smolowe et al., <i>Japan's Aimless Generation</i>	37
7) Kim Song-ho, <i>For Peace and Freedom</i>	41
8) Yushi Odashima et al., <i>Associations - Linked Mini-Essays -</i>	49

IV [1986.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, T.KATO, M.SUDA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ iii
1) Alice Gook & Gwyn Kirk (Ed.), <i>Greenham Women Everywhere</i>	1
2) Kenji Miyazawa Translated by John Bester, <i>The Kenju Wood</i>	10
3) Maurice H.F.Wilkins, <i>Disarmament: The Most Immediate Issue</i>	21
4) Shirley Chisholm, <i>Women and Their Liberation</i>	25
5) Tracy Dahlby & David Lewis, <i>The Economics of Relaxation</i>	33
6) Barry Reed, <i>The Verdict</i> (Film).....	35
7) John Okada, <i>No-no Boy</i>	47
8) Frank Spotnitz, <i>Bob Geldof: Making Music That Saves Lives</i>	61

V [1987.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, T.KATO, M.SUDA, M.HIHARA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) Robert C. Christopher, <i>The Japanese Mind</i>	1
2) <i>Letters Between a Japanese Student and Dr. Clark</i>	8
3) Compiled by Dr. Arata Osada. <i>Children of Hiroshima</i>	15

4) Reginald Rose, <i>Twelve Angry Men</i> (Film)	34
5) Bernard Malamud, <i>The Jewbird</i>	47
6) Jerzy Kosinski, <i>Steps</i>	56 ~ 58

VOICES OF THE HUMAN HEARTS 1988

Extracts [1988.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, T.KATO, M.SUDA, M.HIHARA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ iii
1) Dick Gregory, <i>Not Poor, But Broke</i>	1
2) Bernard Malamud, <i>The Jewbird</i>	6
3) Kenji Miyazawa Translated by John Bester, <i>The Kenju Wood</i>	15
4) <i>The Girl with the Large Eyes</i> - A Folktale of Africa -	26
5) Paule Marshall, <i>The Valley Between</i>	30
6) Howard Fast, <i>The Passion of Sacco and Vanzetti</i> (Film)	39 ~ 50

VOICES FOR FREEDOM 1989, 1991

[1989.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, M.SUDA, H.TAKEDA, M.HIHARA, M.YOSHIDA

はしがき	i ~ iii
1) John Briley, <i>Cry Freedom</i> (Film).....	1
2) <i>A Cry from South Africa: Free the Children from Apartheid</i>	7
3) <i>Freedom Charter</i>	13
4) Janice Mirikitani, " ... <i>If You Don't Want to Believe It ...</i> ".....	18
5) <i>Mississippi Mothers: Roots</i>	20
6) <i>Universal Declaration of Human Rights</i>	26
7) Maya Angelou, <i>Caged Bird</i>	33 ~ 34

VOICES FOR EQUALITY 1990

[April - July, 1990.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, M.SUDA, H.TAKEDA, M.HIHARA,
M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) Leonore Fleischer, <i>Rain Man</i> (Film)	1
2) Alan Sillitoe, <i>The Bike</i>	12
3) <i>Japan's New Women</i> <i>The Newsweek</i> , Jan. 15, 1990	20
4) <i>Poems and Flower Paintings</i> from <i>Journey of the Wind</i>	30 ~ 32

[Sept. - Dec., 1990.4] Y.IKEUCHI, S.OKA, M.SUDA, H.TAKEDA, M.HIHARA,
M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) Leonore Fleischer, <i>Rain Man</i> (Film)	1
2) Issac Bashevis Singer, <i>The Washwoman</i>	12
3) <i>A Perspective on Equality</i> SHOSHA NI HATARAKU JOSEI NO KAI	19
4) <i>Poems and Flower Paintings</i> from <i>Journey of the Wind</i>	29 ~ 31

VOICES FOR FREEDOM II 1991

[April - July, 1991.4] Y.IKEUCHI, T.UCHIKIBA, M.SUDA, H.TAKEDA, M.HIHARA,
M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) Ron Kovic, <i>Born on the Fourth of July</i> <Film Presentation>	1
2) <i>Karoshi</i>	
<i>The Auto Industry</i>	
Shinji Sakuma and Hideaki Ohmori	23
<i>An Advertising Agency</i>	
Shinichi Oka and Mitsue Yagi	33 ~ 42

[Sept. - Dec., 1991.4] Y.IKEUCHI, T.UCHIKIBA, M.SUDA, H.TAKEDA, M.HIHARA,
M.YOSHIDA

はしがき	i ~ ii
1) Ron Kovic, <i>Born on the Fourth of July</i> <Film Presentation>	1
2) <i>Karoshi</i>	
<i>The Service Industry</i>	
Yutaka Iwaki, Katutoshi Yamamoto, Masakazu Zaizen,	
Masaaki Takehashi, Atusho Tanaka and Kiyoshi Hidaka	
<i>A Female Employee of a Major Bank</i>	
Yoko Kuroiwa and Hiroshi Kawahito	

That's all.

資料

1971年 学部に就任した時のテキスト

は し が き

このテキストに収められた作品は、現代アメリカの白人作家 E. Caldwell の短篇小説 *Wild Flowers*, アメリカの黒人作家 J. H. Clarke の短篇小説 *The Boy Who Painted Christ Black*, そして現在アフリカのタンザニア連邦共和国大統領 J. K. Nyerere の論文 'Ujamaa'; the Basis of African Socialism である。これらは私たちが編集した *Voices of the Oppressed* の I と II から抜粋したもので、内容は、新興の意気に燃えるタンザニアの状況をつし出した物語と、新興の意気に燃えるタンザニアの社会主義であり、それぞれに現代的な意義をもつ興味深いものである。よく味わっていただきたいと思う。

1971年3月

編 註 者

1967年 最初のテキスト

は し が き

このテキストに収められた作品は、現代アメリカの作家 E. Caldwell の短篇小説 *Wild Flowers*, 南部ベトナムからの手紙二篇と北部ベトナムの作家による物語 *The Cradle*, ニグロ労働者 J. Boggs の著書の一章 *Rebels with a Cause* および、ガンジの非暴力抵抗の哲学を説く *Non-violent Resistance* とである。このように内容に多様性をもたせたのは、ともすれば陥りやすい授業の単調さを避けたいと考えたからである。もっとも、各篇は内容的には決して無関係ではない。そのいずれをとってみても、諸君は、抑圧された、また現に抑圧されている民族や階級の悲しみと怒り、勇気と闘志とを、そこに読みとることができるであろう。このテキストに *Voices of the Oppressed* (虚げられた人びとの声) という表題を選んだのも、このような意味からである。これらの作品が、また、自由・平等・独立・平和を課題とする日本人民の、民主的・民族的教育のために行くらかでも役立つことがあるれば、編者としてこれにまさる喜びはない。

註釈は編者四名の共同討議によったが、*Wild Flowers* と *The Cradle* は武並, *Letters from South Vietnam* よりの二篇 (*From Father to Son* および *Letter from Ca Mau*) は岡, *Rebels with a Cause* は須田, *Non-violent Resistance* は片山がそれぞれ主として担当している。しかし、なお不明の点も残り、また思わぬまちがいを犯しているかもしれない。ご教示をいただければ幸いである。

1967年2月

編者一同

1972年 「はしがき」を書く

は し が き

このテクニクには、アメリカ文学にその異才を放つユダヤ人作家 Bernard Malamud (1914—) の短篇小説 *The German Refugee*, 黒人社会を描き、作品に豊かな詩情を漂わせる黒人作家 Langston Hughes (1902-1967) の短篇小説 *The Gun*、インドの独立達成に尽力し、連邦成立後は初代首相となった Jawaharlal Nehru (1889-1964) が十年にわたる牢獄生活の中から愛娘 Indira (現インド首相) に送った *The Last Letter to Indira* の三篇を収録している。テクニクの表題に示される通り、いずれも現代社会にあって、根強い差別と厳しい迫害のもとに置かれた人たちと、実際に民族の独立と解放のために苦闘してきた人の声である。Malamud と Hughes の作品は、小説ではあるが、長い難民の歴史を担ってきたユダヤ人、また不当な人種差別に苦しむアメリカ黒人の現実社会での生きる苦しみ、怒り、悲しみが、勇気と意欲が、鮮やかに描写されている。これらはまさに平等と尊厳においては人種をも民族をも越えた人間の魂の実録である。この意味では我々日本人にも強く訴えるところがあるはずだ。Nehru の書簡の、高い知性に裏づけられたわが子への真情とともに、学生諸君が、言語の厚い壁を打ち破り、みずからの目で⑤で深く味わっていただけたらと確信している。

1972年2月 編 註 者

い

1973年 初めて教材を提出

は し が き

産業社会学部では、昭和40年の学部創設以来、専任の英語担当者間で一定の話合いのもとに、統一英語教材 *Voices of the Oppressed* 4冊を編集してきた。それらは主として1年度の前学期を通じて使用されたが、それとは別に、適当な作品若干を採挙して半期分程度の使用に供した場合もあった (*Extracts*)。ところで、このシリーズに共通している点は、いずれも、その作家なり論者の有名無名を問わず、また、地域的には、ヨーロッパやアメリカにとどまらず、アジアやアフリカやラテン・アメリカなど世界のすみずみから作品を選り集めたことであつた。

今日、われわれの知所まなざしは、従来の「欧米中心」を離れて、広く速く世界のすみずみ、世界の諸民族のうえに注がれているが、それは新しい「世界観」「人間観」の形成のためには、激動する現代が、まさに時代の急務として、すべての人びとにそれを強く要請しているからであらう。

このたび、まえのシリーズの精神をそのまま踏襲して *Voices of the World Consciousness* (半期用) を編集することになった。ここには、M. L. King や E. M. Forster や K. Marx など、それぞれ分野ですでに世界的に命名の高い人びとの作品も含まれているが、また、ここに収録されている作品以外、わが国にはほとんど紹介されたこともない無名の人もいる。現代が要求する「知的綜合」をはかるためにも、名声のあるなしにかかわらず、また、人間の肌の色についての奇妙な先入観にとらわれることなく、これらの人びとの「良心の声」に傾聴してみることは、それ自体、意義のないことではないと信じる。

1973年4月1日

産業社会学部英語科

岡 節三 片山 智 須田 稔

吉田昌子 宮本正興

1981年 映画による英語学習実施（1980年からテキストに写真・イラストを導入）

は し が き

産業社会学部では、学部創設の翌年（1966年）から今まで、外国語教育の理念や目的、またその方法について学部英語科専任教員の間で共同討議を重ねながら、年ごとに自主編成の英語テキストを編集・使用してきた。すなわち *Voices of the Oppressed* 対冊、その抜粋篇 *Extracts from the Voices of the Oppressed* 2冊、*Voices of the World Conscience* 4冊、その抜粋篇 *Extracts for the Human the Voices of the World Conscience*、および *Voices for the Human Rights I, II*、Ⅲの訳刊としての本テキストがその成果である。

われわれのテキストのねらいは三つある。第一に、全人類的視野を培うため広く世界各国語民族から題材を集めること。第二に、現代的課題に応える作品を探検すること。第三に、英語の多様な文体・表現に接することの重要性から、論文・演説・書簡・小説・戯曲、詩など広いジャンルに及ぶこと、を基本としていることである。

現代の社会の特殊は、政治・経済・文化をとりまき語情勢のめまぐるしい変転、価値の多様化といった顕著な様相をしめす一方、マス・メディアや交通手段の急速な発達にもなつて、世界の諸民族や諸国家が、かつてないほどの緊密なネットワークで結び合わされてきていることである。そこでは、一見、local と考えられる現象がたまたま global な意味合いを帯びてくるとし、個別の問題に対する解決の道が普遍的な認識の枠組みのなかで見出される場合が多い。現代社会のこの特徴を考慮にいれるならば、日本における外国語教育（特に英語教育）の重要なねらいの一つは、適切な言語素材を学ぶことで、外国語としての基本的な実践能力の鍛錬はもちろん、この学習を通じて従来の知識の空白部分を埋め合わせ、豊かな一般的教養を基礎としながら、幅広い「国際的視野」を涵養することであると思われる。同時に、これまで常識とされられてきた知識に対しても批判的な再検討をくわえることも必要であり、このことはわれわれ日本人の外国語教育（特に英語教育）に課せられた一つの重要な現代的要請ともなっているといつてよからう。本テキスト編集の意図もまたその点にある。学芸諸君はこのテキストを学ぶことで、まず「コトバ」を問ひ、ついで外国の「人間」と「文化」の理解をめざすのであるから、何よりもまず、不断の練習、あくことのない知識欲、そして美しいヒューマニズムの精神を要求されることになるだろう。この編集意図は、幸いなことに、学生諸君の間からも支持されてきている。

本年度は以下の作品を収録した。前年度につづいてとりあげた民話、世界三大愚か村の一つとされている *Chelim* というポーランドの町の住民についての愉快な話であり、いわゆる「愚かさ」の意味をわれわれに考えさせるであろう。

日系アメリカ女性のグァテマラに訪れる報告では、アメリカにおける国際婦人年の国内行動が、マイノリティである各民族の底迎の女性たちをも確実にとらえてひろがっていることを示している。

「ローゼンバーグ事件」の長夫の手紙と息子たちの手記は、死を超える愛のつよさと冤罪を晴らそうとする者の私怨を超えた正義感を伝える。世に無実の罪の痛苦に働く人はいし、再審を求めも結果しない場合も少なくない。政治権力がわれわれを迷妄や虚偽の間に安住させてしまったのだとしても、われわれは罪者でない。漸きしうるためには、何をなすべきであるか、を考えたい。

南アフリカの黒人詩人編は、アパルトヘイトといわれる苛酷な人種隔離体制、ファシズム国家のなかで、人間らしい生き方を希求して必死に闘っているアフリカ人の前切な叫びを代表するものである。これらの作品を学ぶことで、西洋・アメリカそして日本の独占資本が生み出した「南了」という新型物とわれわれの新しい関わり方を思求してみたい。

ドルトン・トランプの「ジョニーは戦場に行った」は、戦争の無意味さと恐怖をしみじみと訴える物語である。収録した部分は20章からなる長篇のひとつの章であるが、生きながら死の淵に突き込まれてしまった主人公ジョニーが意識と触覚のみをたよりに自己の生を発見してゆく過程が描かれる。諸君はジョニーの感動をどこまで受けとめられるだろうか。また天文学的数値でなくわえられた核兵器はもちろんのこと、軍備増強の声のやまない現代において、若者を決して戦場に送りたくないというわれわれの熱い願いも知ってほしい。さらに、今年は国際障害者年であるが、ジョニーのように戦争によって奪われた目、手足、あるいは公舎、薬害、交通事故などによってうみだされる障害もふくめて考えていきたい。

ここに収録したすべての作品への諸君の意欲的な取りくみを期待する。外国語に熟達するには不断の努力しかない。このテキストを深く読むだけにとどまらず、広くさまざまな英文に接して、英語の総合的な力量を身につけてほしいと念じている。

1981年4月1日

立命館大学産業社会学部英語科
池内靖子 岡 節三 須田 敏
宮本正典 吉田昌子

1984年 新聞・雑誌の記事が増えはじめ。クイズや英語の歌の使用

は し が き

産業社会学部では、学部創設の翌年(1966年)から今日まで、外国語教育の理念や目的、またその方法について学部英語科専任教員の間で共同討議を重ねながら、年ごとに自主編成の英語テキストを編纂、使用してきた。すなわちVoices of the Oppressed 4冊、その抜粋篇Extracts from the Voices of the Oppressed 2冊、Voices of the World: Conscience, Is it Us? Voices for the Human Rights 5冊がそれぞれ、今年には、Voices of the Human Rights I を編纂した。

われわれのテキストのねらいは三つある。第一に、全人類の視野を盛り込め広く世界各国語民族から題材を集めること。第二に、現代的課題に対応する作品を採録すること。第三に、英語の多様な文体、表現に接することの重要性から、論文・小説・詩篇・小説・戯曲・詩など幅広いジャンルに及ぶこと、を基本としていくことである。

現代の社会の特徴は、政治・経済・文化をとりまき語勢のめまぐるしい変転、価値の多様化といった顕著な様相をしめし、マス・メディアや交通手段の急速な発展により、世界の多様な文化、かつてないほどの緊密なネットワークで結び合わさってきていることである。そこでは、一見、local と考えられる現象がたまたま global な意味合いを帯びてくるし、個別の問題に対する解決の道が普遍的な認識の枠組のなかで見出される場合が多い。現代社会のこの特徴を考慮にいれるならば、日本における外国語教育(特に英語教育)の重要なねらいの一つは、適切な学習教材を学ぶことで、外国語としての基本的な理解能力の鍛錬はもちろんだが、この学習を通じて従来の知識の空白部分を埋め合わせ、豊かな一般教養を基盤としながら、幅広い「国際的視野」を涵養することであると思われる。同時に、これまで常識とされてきた知識に対して批判的な検討をくわねることも必要であり、このことにはわれわれ日本人の外国語教育(特に英語教育)に課せられた一つの重要な現代的要請ともなっているといえる。本テキスト編纂の意図もまたその点にある。学生語彙はこのテキストを学ぶことで、まず「コトバ」を問い、ついで外国の「人間」と「文化」の理解をめざすのであるから、何よりもまず、不断の鍛錬、あくことのない知識欲、そして美しいヒューマニズムの精神を要求されることになるだろう。この編纂意図は、幸いなことに、学生語彙の御からも支持されてきている。

本年度の統一テキスト Voices of the Human Hearts I には、次の8篇を収録している。

① READ BETTER, READ FASTER (by Many and Eric De Leeuw)
読者は、豊かな知識と限りない悦びを与えつつ、読者の視野をひろげ精神活動を高める人間の文化活動の一つであるが、それはまた、言葉一つひとつ正しく正確に地球を包摂し作業のため、ときには苦痛を伴う。いかには否痛を伴う。この作品は、そのように生きているかという問題、映像文化に囲まれ情報氾濫の中で生きている現代の学生にとつて是非とも考えなければならぬ問題の一つだろう。

② STANDING BEAR BECOMES A PERSON
アメリカ合衆国の建設過程が、同時に、「ネイティブ・アメリカン」とも言うべきアメリカインディアンの土地と生命を奪い、彼等を居留地に押し込めてきた歴史でもあること、近年直連されたこと、この作品は、そのような観点からインディアンの歴史を掘りおこす試みとして1970年に出版された Bury My Heart at Wounded Knee から一筆であり、ミズリー州-ネオブララに任んでいたインディアンのボンカス族に対するアメリカ政府の非道な迫害と、彼等の抵抗についてのドキュ

メントである。アメリカ研究の一環として学びたい。
③ GASTROPHILE BY COMPUTER (Editorial of the Saturday Review)
コンピュータ技術の進歩は、人間の幸福に寄与するのだろうか、その軍事技術への応用は核戦争の危険を高めているのだろうか、アメリカのから進歩の論説を素材に考えてみよう。

④ THE SIXTEEN-YEAR-OLD PROSTITUTE (by Ishimura Michiko)
苦悶篇作集; 匿名な石井道子さんの『楳村の娘』の英訳版 (Story of the Sea of Camellias) から一つのエピソードを採った、日本の姿と心を世界に知らせようという意図が英語学習の重要な課題の一つであることを考えるとき、木俣知子で短し生涯を終えた十六女(主人公)への痛切な想いは絶好の素材であろう。

⑤ ROCKY (by Julia Sorell)
これは、1978年に上映された喜劇を基にしたホラック映画「ロッキー」の小説版からの抜粋である。たけやうたは冒険をふりかざして、自己の可能性に挑戦してゆけロッキーの姿が印象的である。まず映画を鑑賞し、作品の全体についてのイメージを掴んだのちに教材を読むので、映画の全体観賞目には必ず出展すること。また、意見発表に生かすために感想文を付けてみよう。

⑥ JAPANS MR HIGHGROWTH TRIPPED BY BRIBES
日本の政治史や裁判史の上で記録に残るであろうロッキード裁判について、アメリカ人特派員が判決直後に書いた記事を選んでみよう。

⑦ DISSARAMENT
国連(経済特別総会)が1978年と1982年の2回にわたって開催されたが、核保有大國とその軍事同盟諸國の指導者たちばかりが國民の中にも、核兵器の開発と増強は戦争を抑止する力になることへの信仰が依然としてある。日本が核戦争の戦場と化するのではないかとという危機感を過半数の國民が抱いている今日、1978年の特別総会に際して企画されたラジオ特集番組に耳を傾けることは有意義であろう。

⑧ THE GIRL WITH THE LARGEST EYES (A Folktale of Africa)
大きな眼の若い娘とつかねつとに彼女に水を与えた魚との愛と死を扱ったアフリカの昔話である。これは部族対立のアフリカの悲劇を象徴しているし、娘が殺された夫の死体を抱いて入水したあと、彼女から生まれた子どもが水運となって水に浮かぶ情景は、アフリカの美の極致であろう。

ここに収録したすべての作品への読者の意欲的な取り組みを期待する。外国語に熟達するには、明確な目的意識と不断の努力が不可欠である。このテキストを重く身につけてほしいと念じている。

なお、原作やこの内容の背景などについての解説、語句の注釈、参考文献などは、別にアクリルで配布するので、予習の際に活用してもらいたい。
授業は、教師と学生が、また学生同士が、共に学習する者としての氣迫をこめてぶつかり合う場である。一方が、あるいは一人でも、感情であったり真刺さる欠いていたりすれば、他方が、あるいはクラス仲間たちの真摯な人生のひとときは決して責められる

1984年4月1日

立命館大学産業社会学部英語科
池内靖子 加藤恒彦 岡 節三
須田 敏 吉田昌子

1991年 統一テキスト 最後の年

は し が き

平和と社会進歩はわれわれの願ひである。1991年の年明けは湾岸戦争で始まった。今日、核兵器をはじめとする軍備競争は人類滅亡の脅威となっている。科学技術の急速な進歩と政治・経済・文化をめぐる諸状況の変動は、ともすれば地球規模の破壊をもたらし、あるいは人間関係のありどころを見失わせようとしている。このような時代の危機に立ち向かってわれわれが生きていくときの拠りどころは、まずあらゆる生命の尊重とヒューマニズム精神の発露にある。

世界の諸民族との親善友好はわれわれの願ひである。今日、マスメディアや交通・通信手段の驚異的な発達もあって、諸民族や諸国家はかつてないほど緊密なネットワークで結びつき、localと見える現象もたまたまglobalな意味を帯びる。たとえば、中東の人びとの戦争への恐怖は世界の人々にとっても平和への脅威となり、アフリカの飢饉は日本の飢饉・経済成長を問う問題となり、ニュージーランド政府の核実験警告は社会は日本の非核三原則の完全実施を願う人びとへの激励となる。いまわれわれに必要なのは、全人類の視野であり国際的相互理解の態度である。

英語教育のめざすところは、平和と社会進歩、国際友好という願ひを実現するための力を養成することである。英語学習の目標は実践的英語能力を獲得することであり、これは不断の練習を要求する。だが、実践的英語能力とは単に単語・文法の知識や会話力の習得にとどまるものではない。それは同時に、従来の知識の空白部分を埋めたり、常識や通念を批判的に検討したり、自己の思想を表現したりする能力を意味している。従って、これは越えことのない知識欲と、言葉・人間文化についての旺盛な理解力を要求する。

産業社会学部では、学部創設の翌年(1966年)から今日まで、英語教育の理念・目的・方法について学部の専任英語教授が共同討議を重ねながら、同時に学生諸君の意見・感想の実態を顧慮しながら、年ごとに英語テキストを編纂し1・2回生共通に使用してきた。しかし、87年度からは、基幹時間割の全学的再編などのため、1回生のみを対象に使用することになっている。「統一テキスト」という通称には、教員の共同討議の所産であり、編纂方針と教材内容は毎年大半の学生諸君から支持されてきたという意味がある。

「統一テキスト」編纂の基本方針は、①全人類の視野を指うため広く世界各国諸民族から題材を集めること ②現代的課題に応える作品を採録すること ③多様な文体・表現に採ることの重要性から、論文・演説・書翰・小説・戯曲・詩など広いジャンルに及ぶこと、である。23年間の編纂の歩みは、*Voices of the Oppressed* 4冊、その抜粋篇 *Extracts from the Voices of the Oppressed* 2冊、*Voices of the World Conscience* 4冊、その抜粋篇 *Extracts from the Voices of the World Conscience* 1冊、*Voices for the Human Rights* 5冊、*Voices of the Human Hearts* 6冊、*Voices for Freedom* 1冊、*Voices for Equality* 1冊となる。

ここに収録したすべての作品への語者の意欲的な取り組みを期待する。外国語に熟達するには、明確な目的意識化と不断の努力が不可欠である。このテキストを深く読むにとどまらず、日常的に広く多様な英文に接して、英語の総合的な力量を身にかけてほしいと念じている。

なお、原作やその背景などについての解説、語句の注釈、参考文献などは、別にプリントして配布する。予習あるいは復習に活用してもらいたい。

授業は教師と学生が、学生同士が、共に学習する者としての気迫をこめてぶつかり合う場である。一方が、あるいは一人でも、怠惰であつたり真剣さを欠いていたりすれば、他方の、あるいはクラスの仲間たちの、貴重な人生のひとつときは浪費される。

1991年4月1日

立命館大学産業社会学部英語科
池内靖子 内木場秀 須田 稔
武田幸子 松原美恵 吉田昌子

第二部 公開授業

はじめに

テキスト，Basic English Paragraphs の紹介

1 回生の後期セメスターは、ライティング（writing）のクラスなので、そのまとめとして文集を作ったこと、今日はじめて、その出来上がった文集をひとりひとりに渡すこと、学生は今日はじめて出来上がった作品を見ることになるのを告げる。さらに、文集のなかのエッセイから、ひとつ選び、本人に朗読してもらう予定であることを参加者に伝える。

スポーツサークルで活躍している学生の出席を確認しながら、クラスの特徴を参加者に伝える。

中教室。学生は4人掛け3列にわたって座っている。よくある風景なのだが、3列のうち、両側は前から詰めて座っているのに、真ん中の列は前から4列が空席のままである。

授業を始めるにあたって若干の説明

「さていよいよ、自分で宣言してすみませんが、えーこういうお粗末な話で第一部をおわらせていただきまして、さあ、それでは勉強しよう、授業しよう、ということなんですが、なんでここが空いているんだろう（前から4列の空席を指差しながら）。みなさんちょっと見てください、今日は一回生のFクラスのみなさんは目をぱっちり開けてわたしを見てくれています。全員出てきてる？ 光岡さんも出てきてるね。光岡さんが出てこないのはチアー・リーダーのサークルで谷掛さんといつも忙しいし、来海（キマチ）さんと杉本さん、来てるか。ああ、来てるな。来海さんと杉本さんは（硬式）野球で忙しいし、奥野さんは.....、今日は試合（アイス・ホッケー部）がないのか、と思いますが、このクラスはそういった人たちなんです。ダンス部の人もおられるし..... ね、松田さん。モダンダンスの人もおられるという風なクラスなんです。

（解説）このクラスはライティングのクラスです。テキストはこれを使いました（テキストを掲げて示す）。このクラスは、ライティングの練習をしていき、最後にその成果として文集をつくりまします。みんな苦労しましたがけれど、何度も何度もわたしとやりとりをして、全員が書きましたね。見てください。こんないい文集になりました。表紙の赤色がなくて、わたしたちのクラスだけ、池内先生（今年度の英語担当者主任）が、もうひとつ上質の紙を特別に選んでくださって、ほら、こんなに厚い紙なのです。綺麗でしょう。表紙の絵は、

* 立命館大学産業社会学部教授

以学館が、Topics, Topics, Topicsと歌っているのです。あとで中尾美希さんのを読んでもらいます。

「ほんとうに、この文集をつくる時も（「文集」を掲げて見せる）、すごく、すごく、みんなが一所懸命に書いてくれて、そして何回も何回もやりとりしましてね。ほんと、よくやってもらえて、ま、量の少ない人もありますけれど、みんなが書いてくれたということがよかったと思います。この中でひとり、この立命館の近くを走っている京福電車のことについて書いてくださった人がいますので、その人に読んでもらおうかと思っています。今、読むか、中尾さん。今にするか、せっかく出したので（ここで、中尾美希さんに「文集」を一冊渡す）。その間に、えーっと、みんなは今日やるところを、いちおう言っていたけれど、そこのところをやりましょう。

（解説）クラスのなかに、途中でテキストを無くした学生がいる。学期中に2週間、その学生は欠席していたのだが、再び出席した時に理由を尋ねると、その間アメリカのシアトルへ行っていたとのことだった。彼は途中から、テキストが無いまま出席しているが、わたしのとった方法は、テキストの“Exercise”の頁をコピーして全員に渡し、そのコピーで毎時間課題を学習して、解答など記入してもらい、名前を書いて提出してもらおうという方法でした。

テキストの学習に移る準備の間に、「文集」をクラスの人たち全員に配るため学生に協力を求める。萩さんと杉本さんが立ち上がって手伝ってくれる。

「（テキストを掲げて紹介しつつ）いまわたしたちが使っておりますのは、Basic English Paragraph というもので.....、コピーが何かを、（参加してくださっている）皆さんにも作ってくればよかったと今にして思いますが、（オーディオ）テープを使いますので、どういう内容がお聴きください。そして、クラスのみんなは、わたくし、よく授業でやるのですけど.....

この時はじめて「文集」を手にしたので、みんなは「文集」に気をとられている。

（解説）あっ、いまちょっとみんなは、あの、はじめて「文集」を手にとります。（わたしと本人とは）お互いにやりとりをして、どんな風に完成していったかは、自分のは判るのですが、他の人のを見ているみたいです。

「その間に、このテキストのことですが、短い教材が集めてありまして、イングリッシュ・パラグラフとなっております、パラグラフ用のテキストかなと思うのですが、パラグラフ・リーディングのテキストのような組み立てになって..... それでまあ、パラグラフがどのように構成されている

かという説明がずーっとあるわけですけど、書くという練習よりも、内容を読み取っていくという練習問題が多くって、この短いパラグラフを、実はテープで聴きはじめてのはごく最近なのですけど、ま、読んでいって、一行ずつぐらい読んでもらって、それから、時間がありますと、わからないところはみんなに、とにかく、辞書で、その場で調べていくという風に、ちょっとまあ、オーソドックスなやり方なのですけども、やってもらって、ほとんど中身を、訳するとか、詳しく説明するとか、ということをしなくて、だいたいこんなことね、というところで、練習問題に入ってもらいます。その時に、わたしはもうちょっと横着で、みんなにノートをもってもらったりしないで、いまもそうなんですけれど、コピーして、これなんですけど、そのページをコピーして、それを渡しまして、それに練習問題をしてもらって、その場で、解答してしまう場合もありますけれど、「解答」しないで、提出してもらって、それをこちらでチェックいたしまして、どの程度の成果をあげているかという風に、まあ見ていくわけなのです。ほとんど毎回やります。

「他の英語の先生がた、外国語の先生がたはみんな同じだと思いますけれども、最近のシステム（カリキュラム）になりましてからは、とにかく課題を毎回毎回こちらが見ていかなければならないという、そういう辛さのなかに居るわけですけど、ま、その分、学生ひとりひとりとコミュニケーションできるという面は、大いにあるという風にわたしは思います。なかには、コピーをするものですから、テキストを初めから買うてないのかと思われる人もあって、坪井さん、（あんたは）はじめから買うてないのか？ 買うたん？ 無くしたん？（本人頷いている）いつ無くしたん？ 無くなったら言うてこんとあかへん。でも、途中でアメリカへ行ってたもんナ。彼は途中で2回ほど休んだので、どうしたん、というアメリカに行ってたというので、アメリカのどこ行ってたんという、シアトル？ シアトルだったっけ？ シアトル行ってきました、というて帰ってくるんですよ。ということで.....。

Basic Paragraph Writing の学習

「それじゃ、これ、（プリントを出す）今からやってもらおうし、取りに来て。ご承知のように、教材のこのこのところ、リーディングしているテープがありますので、それを今から使います。

テープを機械にセットする。

「皆んないいかナ。何頁か憶えているかナ。

テープを聴く。

Paragraph B

Why Many Scandinavians Speak English Well

¹ When I visited Scandinavia, I found that many people spoke English well, and I wondered why. ² I asked people I met about the reasons, and they gave various explanations. ³ One reason is that Scandinavian students study English beginning when they are ten years old, which is important. ⁴ Also, English and the Scandinavian languages are closely related, so English is fairly easy for Scandinavians to learn. ⁵ In addition, the teaching methods emphasize speaking English, so students become quite good at speaking. ⁶ Another reason Scandinavians speak good English is that they need it to communicate with people outside of Scandinavia. ⁷ The Scandinavian languages are not widely spoken outside of Scandinavia. ⁸ Therefore, if they want to be able to communicate with other people, so people, English is useful. ⁹ Finally, there are a lot of English programs on television, so people have opportunities to hear English. ¹⁰ These factors combine to help make many Scandinavians fluent English speakers.

Cause and Effect (2) 79

Comprehension Questions

- 1 . What did the writer wonder when she visited Scandinavia?
- 2 . What is the first reason for this?
- 3 . What do teaching methods emphasize?
- 4 . What can Scandinavians see on television?
- 5 . How does this help?

[それでは、また、いつものように、ワン・センテンス (one sentence) ずつ読んでいってもらおう。
谷掛さんから行こうか。ワン・センテンス！

谷掛さんのリーディング。声が小さい。

「(参加してくださっている方たちに向かって)ほとんど聞こえませんが、大きな声を出しなさいと、わたしは言わないんです。これでもう、O.K.なのです。それでは光岡さん。セカンド・センテンス。(光岡さんリーディング) O.K. 横へ行くわね、足立さん。(足立さんリーディング)

「O.K. Thank you. この間に、While we are reading, 読んでいる間に、Try to find how many reasons...。 reasons という言葉、the word “reason.” Try to find the word “reason.” How many are there? いくつあるか見といてナ。はい、柴田さん。(柴田さんリーディング、行き詰まる) まあ、好きに読んで。(柴田さん、続けてリーディング) ちょっとここで気になったのは、スカンディナビアというけど、スカンディネイビアンと読むの。こっちの列のうしろは.....? 森さん、

どうぞ。（森さんリーディング）ちょっと難しいけどこれ，エムファサイズ（emphasize）。はい，そのお隣りが..... 松田さん。（松田さんリーディング） O.K. “outside of Scandinavian” は2つ並んでいるね，どっち？どのナンバーの方を読んだ？ 松田さん。

「6番」

「6番，O.K. 来海（キマチ）さんの後，誰だった。中村さん，読んで。7番。（中村さんリーディング）お隣りはどうなりますか。伊藤修平さん。（伊藤さんリーディング）じゃ，その前へ行くわ，来海さん。（来海さんリーディング）ありがとう。あっ，その次のは難しいわ。オーポチュニティズ（opportunities）。ほおい，杉本さん。（杉本さんリーディング） - スカンディネイピアン - （杉本さん，続けてリーディング） - フルーエントリ，いやフルーエント（fluent）です。

（解説）ほとんどぶっつけ本番でやっています。で，あの予習や復習とか，もうこれは，やって欲しいんですけど，やっぱり，ほとんどサークル活動で，なかには，バイトで，ほかの授業で，なんだか振り回されているのを見ますと，ほんとはそれでもやらんとあかん，と言わんとあかんと思うのですが，なかなかわたし，強制，強要できなくて，だもんですから，出てきた時にしっかりやってねという形でやっています。今日も，だいたい，事前に，次はこれかな，と言っていたのですが，けれども，もうひとつ選択肢にしていた，「なぜスカンディネイピアの人たちはこんなに上手に英語を話せるの」というのを最後に選んで締め括りにしようと思って今日になって思ったのです。そんなことで，一度だけテープを聴いて，今日のこの授業でなければ，テープ，もう一度聴けるんですけど，ま，一度だけでやってもらったわけです。わたしは甘いかもしれませんが，今読んでもらったので，わたしは < 皆んなが > 読める > と判断しているのですね，読めていると思うんですね。決して Native のようには読んでませんけれど，なかには読めない単語もありますし，発音もいっぱい間違っていますけれど，でも，わたしは読めてると思う，というわけなのです。

「さて，それじゃ中身に行きます。reasonのところ。この教材は，Cause and Effect の UNIT のところですから，理由があって，その結果，このようになるということです。まず書いた人が，スカンディナピアに行って吃驚したことは..... それで，もう次の練習問題も，ついでに見てくださいよ。スカンディナピアに行って吃驚したことは..... （練習問題に）1. What did the writer wonder when she visited Scandinavia? と書いてありますね。wonder... ちょっとここ考えてみて... 答えが書けたなら書いておいてください。（本文で）When I visited Scandinavia, I found that many people spoke English well, and I wonder why. それから，その理由が述べられていくわけです。

「で，普段は，これもまあ，しょっちゅうやっていたわけではないのですが，だいたい，このようにして，練習問題をちょっと読みながら本文に遡って答を書いていってもらうわけです。で，（学生に向かって）皆んな解らないところって，質問したことがあった？ あまりなかったかな。という具合にいくんですけど，この前はなぜか問題を黒板に書きまして，若干ヒント的，部分的

に答を書きまして、残りの部分に何が入ったら答が完成するか、というふうなやり方で勉強してきました。今日は、あの、こちら(学生)に動いてもらってすることは、あとにひとつだけあるんですけど、それは、皆さんとしめし合わせてあるんですけど、今は、(黒板に書いてもらう)時間もないようだし、どんどん(プリントに)書いていってね。で、時間がきたら、今日は、もう、途中でも、そこで止めて、次のことにいくわね。で、プリントの課題に戻ると、何で「ワンダー」、I wonder になったのか。(答)見つかったかな。

「じゃあ、second question いろいろ、(テキストの)内容を見ながらいってね。“reason”という言葉に注意してね。はい、2番目は What is the first reason - the first reason がここで出てきているワ - for this? this というのは、今の wonder で、わたしは wonder しまして、asked people I met で、たずねてみたら、they gave me various explanations、いっぱい説明してくれたんだけど、その次に one reason と出てきたね。だから、first reason というのは.....ここで見付けてもらったらいいわけね。そこでね、村瀬さん、ははは、村瀬さんあててやったわ。はい、食堂で会った時にね、村瀬さん一番に当てるからね覚悟しててねって、しめしあわせておいたんだワ。

「えー、one reason というのは、What is one reason, the first reason? ちょっと、抜き出したところ読んでみて。(村瀬さん、リーディング)そう good, thank you. そう、そんでいいのよ。One reason is that Scandinavian students study - study よ。Learning when they were ten years old. - they were ten years old, 10歳からはじめたということ。書いていてナ。はい、そんなので、どんどん行くわけなんです...、それじゃ、時間の調整のために、5番までを、みんな、答をさがしてみてもね。で、そこで、10 years oldに、English language を study するもんだから、それで they can speak English well となるわけ。

「じゃ、問題3。teaching methodsと書いてあるね。teaching method. これも one of the reasons. いくつか reason があるわけだけれど、そのうちのひとつ。この時は残念だけれども reason という言葉ではあらわしていません。じゃ、いまみんなに、reasonに注目してくださいと言ったけど、そのまとめをしなしてもらいますよ。ナンバー3のセンテンスの one reason が、まず、最初のグループ。ナンバー5の in addition のところにもうひとつ reason がでてくるわけ。reason という言葉はないけれど、もうひとつの reason が、ここに出てくるわけ。ここのところで、Teaching methods emphasized speaking English, so students became good at speaking English と書いてあるやろう。だから、teaching methodsの問題がでてきているし、これが答になるの。で、問題3は完成いたします。はい、じゃ、問題4。What can Scandinavians see on TV? Television つまりTV. これは、えー、2ついま reason を探してきたわけでしょう?こんどは6番目、シックスに Another reason Scandinavians speak good English is that they need it to communicate with people outside of Scandinavia.とあるのだけど、この辺では、まだ見つからないので、The Scandinavian languages are not widely spoken outside of people. Therefore、これは理由にはならないね。if they want to be able to communicate with other people, English is useful. Finally....., there are a lot of English programs on television..., reason という言葉は出て来てない

けども，one reason があって，In addition があって，another reason があって，そして，Finallyとくれば，ここで最後の reason があるのかナーって，ちょっと見当をつけてもらって，there are a lot of English programs on television, so people have opportunities to hear English.ここで television とあるから，この辺から答を見つけ出してください。で，4番目の答は，Television ということになります。問題の5。ちょっとこれややこしいな。How does this アー help? How does this help? ちょっと考えにくいな。これが何の助けになる? テレビに出てきたら，何でたすけになる? テレビで盛んに英語が，英語のプログラムがテレビに沢山あったら，どんな役に立つ? これが最後の質問。伊藤修平さん。一番最後の答，もう書いた? まだ書いてへん? 長谷川さん。書けた? ちょっと言うてくれる?」

“ It has (ママ) opportunities to hear English. ”

「(頷きながら，聞き)という答が正解。コレクトアンサーなの(正確には“It has”が“people have”となる)。(皆んな)そこまで行っているか。その答になっているか。

「それじゃあ，皆んなのを見せてもらいます。この次の時間に，正解を教室で言う機会はないけれど，そのまま出して見せてください。これ全部しようと思ったんだけど，宿題にするわけにいかんしな。次の機会がないしな。

テープを巻き戻す。テキストの文章を，Comprehension Questions まで，再度テープで聴く。

「文集」から，エッセイを朗読

「今日は，日頃眠っている人も，ちゃんと背筋のばして座っていたものナ。はい，少しぐらい伸びして，リラックスして.....そして，中尾さんの読んでくださるのを聴いてください。中尾さん，やろう。ぶっつけ本番やけど，やる。そして，これがあったほうがいい? (マイクを中尾美希さんの席まで持っていこうとする)これ延びないの?(中尾さんに)ここくるか?」

「どっちでもいい」

「ここくるか? どっちでもいい? えらい，えらい。ほな，ここ来て。これは中尾さんが，今年の後期に書いた可愛いエッセイです。」

中尾美希さん。教卓のところに立つ。

“ Good afternoon. My name is Miki Nakao. I'll talk about Keifuku Line from now ”

(中尾美希さんの朗読)

Keifuku Train

Keifuku train runs through Kyoto City. It is a streetcar, which runs on the road where many other cars run, too. Of course, it stops by traffic signals. It has one passenger car and one motorman in, so it's like a bus.

It runs in the northwest part of Kyoto City and carries many kinds of people, businessmen, housewives, students and many sightseers. I also used this train to go to school when I was a high-school student.

It has two lines. One is Arashiyama Main Line, and the other, Kitano Line. Arashiyama Main Line carries us from Shijo-Ohmiya (the center part of Kyoto City) to Arashiyama. Arashiyama is a famous place for sightseeing. In Spring, cherry blossoms are very beautiful. Furthermore, the leaves of the trees turn into colors in Autumn.

There are many temples near Kitano Line. We can go some temples from almost all of the stations on Kitano Line. Some stations have the same names as temples. Sightseers often use this train, especially, on holidays when it is crowded very much. When it's crowded, it has two passenger cars and conductors take part in each car.

Usually, there is no ticket for this train. Only big stations have ticket machines. We have to sweep coins or the coupon tickets when we get off. There is a commuter's ticket for people who often use this train, for example, for students. Also, sightseers who want to visit the places along the line can use one-day ticket. They can get on the trains over and over again with this tickets.

Keifuku train has the history of 90 years. Some people come to Kyoto just in order to see or get on this train. I like this small pretty train. I would like to recommend this train to the visitors of Kyoto. Why don't you get on the Keifuku trains?

“ That's all. Thank you for listening. ”

「 She is speaking in English. Thank you. I didn't ask her to speak in English. Thank you. (誰かが、日本語に訳してと言う) えっ！日本語の訳をするの?! (会場の参加者にむかって) She used to be a student, my student, in the first seminar (semesterの間違い) among them, always here, an ah... yes, one year..., anyway, I didn't ask it, she spoke, you spoke, in English. こんな風にして、もっと、もっとざっくばらんなのです、実は。もうほんとに。寝ていたりしたら、<寝てるの、ほな、とばし>と、こんな感じでやっちゃうんですけど、今日はさすがに皆んな目をぱっちり開けて。はい、Thank you. ありがとう。あとで、それじゃ、集めるしね。

アトラクション： 「ダニー・ボーイ」の歌詞の穴埋めと歌のデモンストレーション

「で、その次、アトラクションがあるんですけど... 時間は... ちょっと苦しいけど... 事務長さん。あの、これみんな貰ってくださっていますか。えっと、あの、穴埋めの、ブランクのあるのを（会場の）皆さん、貰ってくださっているでしょうか。クラスの皆さんは、わたくしのところでもういっぺん渡すわ。あの、はい、こんな具合に授業をやっているのですが、えーっと前に須田先生がお辞めになる時にね。須田先生は、パフォーマンスなさいましてね。で、あの、須田先生の学生さんたちはね、ヘイ・ジュードだったかな、コーラスで。そしてね、学生の部と教員の部からも何か皆んなで歌ってくれと言われたのですよ。それでわたしは、わたしはすぐに乗っちゃって、すぐ本気に受けとめるもんですから、それで、用意したんです。それが、今、皆さんのお手元に、行きますか？ それが穴埋めのダニー・ボーイなんです。1984年、この時に使った穴埋めの練習の用紙で、1984年と書いてあったのですが、あまりにも恥ずかしいので、消して、新たに、ま、使うのですが、これを（学生の）皆んなが埋めていってくれますので、（会場の）皆さんも、座興に、あの、埋めてくださって、あとで気が向いたら一緒に歌ってください。それでもう、最後なんですけど、そのプロセスは、わたくしが言葉を言いながら読んでいきますので、それを聞いて埋めていってください。その次に、曲を、ゆっくりした曲、イギリスのキングズ・シンガーズのコーラスを聴いていただいて、また、それをなぞっていただいて、で、最後にみんな、なかなか歌うてくれへんのやけど、あの、歌って...。で、もひとつ、オールド・ラング・ザインをテープに入れてますので、これの歌詞も、事務長さん、配ってくださった？ B4の分。で、それは1993年と書いてあるのですが、それも1984年に使って、もういっぺん93年にも使って、時々、使ってるのですが..... それは、スコットランド語で、あのちょっと難しいみたいです。それは、ま、ほとんど聞いていただくだけでいいかなと、で、ま、これをフィナーレにしようかなという話が、こちらで出来ているんですけど、ま、そんなところで終わっていきたくて思っています。ちょっと時間が..... 今、4時12分。で、もうほとんど無いわけですけど、すみません、お付き合いいただければ、お願いします。（クラスの学生たちに）で、いこうか、また、もういっぺん、穴埋めしてや。今度は完璧に出来るかどうか。

「えーっと、あ、まあ、いずれにしても.....

（歌詞を読む）

LONDONDERRY AIR (DANNY BOY)

Oh Danny boy, the pipes, the pipes are calling
From glen to glen and (down) the (mountain) side

The summer's (gone) and (all) the (roses) falling
 'Tis you, 'Tis you must go and I must bide

But come ye back when summer's in the (meadow)
 Or (when) the valley's hushed and (white) with (snow)
 'Tis I'll be (here) in (sunshine) or in (shadow)
 Oh Danny boy, oh Danny boy, I love you so

「ちょっと早いかな？ ちょっと早いかな。」

(歌詞のつづき)

But when ye come and (all) the (flowers) are dying
 If I as dead as dead I well (may) (be)
 You'll (come) and (find) the (place) where I am lying
 And kneel and say an ave there for me

And I shall (hear) though soft your tread above
 And all my grave will warmer, sweeter be
 For you will bend and (tell) me that you love me
 And I shall (sleep) in (peace) until you (come) to me

= sung by THE KING'S SINGERS =

Date _____ Class _____ Name _____

テープを機械にセットする。

「歌詞は、最後は湿っぽくてね。 <土の下で待ってるよ... 土の下で待ってるよ。 > という歌なのですよ。」

テープの歌 (授業終了のベルが鳴る)

ここで、参加して下さっている方に、時間が来たので、退室を促し、ご都合のつく

方には、もう少し留まってくださることをお願いする。

「今、これを、実は、あの皆んなが穴のところの正解を（黒板に）書きに出してくれるはずになっておりますので、せっかくですので、皆んなに正解を書いてもらいたいのです。アトランダムに当てますので..... 池田さん、遠藤さん、沢井さん、服部さん、大嘉田さん、伊藤智香さん、斉藤さん、あたってない人は.....？ もう、ほとんど当たったんかな。では、もうもうもうもう、では長谷川さん、そのうしろの中村さん。

当てられた全員は、黒板へやってきて、答を書く。

「ありがとう。全部これで、多分合っていると思います。ま、いささか八百長をしております、ここに到るまでに彼らは... 4回やった？ 5回やった？ やったわけであります。えー、皆んなの前で恥をかかなくてすむように、5回やっているのであります。で、あと何だかちょっとデモンストレーションして悪いんですけど、歌にして、第2スタンザまで皆さんも一緒に歌って貰いたいナ、と思っているのです。よろしくお願いします。

「えーっと、ちょっと口がカラカラで、美声が出るかどうかわかりませんが、耳を塞いで聞いてください。さ、2つスタンザいくわね。皆んなも曲を憶えていたら歌おうナ。いきますよ。

黒板に書かれた解答を辿りながら、歌っていく。途中、old roses（正解はall the roses）のときろまで来て、

「これ、間違ごうてる。折角何べんもやったのに...（会場に笑い）

歌終る

「と、時々歌を指導いたしまして、（拍手）ありがとうございました。あのこの歌詞、<帰ってくる頃には、土の下に居るけど、やってきて、そっと屈んで、好きだったよーって、愛しているよーって言ってくださいって。そしたら、あんたが来るまで心安らかに土の下で眠れるしナ>という歌なんですけど、何だかそういうことありそうなんだけど、でも、わたしは、もう少し生きますんで、またお会いしましょうね。

花束贈与と終わりの言葉

「ありがとうございました。ちょっと時間を延ばしながら、最後まで、はい、あまり面白くない授業を観ていただきまして、えー、皆さんに見送っていただいて、感謝です。ほんとありがとうございましたご

ざいました。

「で、次はもう少し、こうして知合ったわたしたち、< 兎追いし、かの川... いや、かの山、小鮒釣りしかの川 > ほどには、昔から馴染んではいせんけど..... しかし、長い馴染みになったわたしたちが、もう二度と会わないってことがありえようか。えー、そういう歌なんですよ。実はこの< 蛍の光 > ってのはね。最後なんかとって、最後のパラグラフなんか、< さあ君の手をくれたまえ、で、わたしの手を差し出そう > ってね。とてもいい歌だと思います。こちらの方を聴きながら、興が乗りましたなら、一緒に歌ってもらって、ほんとに、あのー、先ほど39年と言いましたが、1961年に（修士課程を）出てね、そして、（次の授業の始業のベルが鳴る）6年間中学校で英語を教えまして、4年間が文学部の助手で、そして、うまいこと、紛争のあの波にのっかりまして、なぜか今日を迎えるような状況を、29年間になりますか、34年間ですか、あの、過ごしてきました。いつかは迎える日だったんですけど、で、そーっと行くつもりにしてほしかったんですけど、でも、ほんとにありがたいです。久しぶりにお会いする方もおられて、で、去年... じゃなかった、前期やったナ？ 前期教室に居てくれたみんなもやってきてくれたし... とても嬉しかったです。ほかの学部の先生方も... もちろん、うちの学部の先生がたも、ほんと、どうもありがとうございました。で、みんなもありがとう。またお会いしたいです。どうもほんとうにありがとうございました。（お辞儀）（拍手）

「事務長、ありがとうございました。」

事務長

「どうもありがとうございました。あの、そうしましたなら、あの、学部と産業社会学会から、あの、花束をお贈りしたいと思います。篠田先生から贈っていただきます。」

篠田学部長から花束。本人感謝のお辞儀ばかりして、握手を忘れる。篠田先生が手を取ってくださり、握手となる。

事務長

「続いて受講者のみなさんから花束を。ひとりひとり渡したいということですので、よろしくお願いします。それから、受講者の萩君、最後に一言述べていただけるといことですのでよろしくお願いします。前に来てくれる？ 英語でやるの？（笑い）」

「いえ、日本語です」

（萩君の言葉）

吉田先生、初めて先生と出会った時、いい意味でこの人は本当に教授なんだろうかと思いました。

ニコニコと笑いながら、そして時にはアカペラで歌を歌ってくれたり、雑談を交えたりしながら授業を進められる姿がとっても新鮮だったからです。そして先生は、私たちに英語の時間に英語を教えるということだけでなく、もっと様々なことを教えてくださいました。授業以外で出会ったときも笑顔で声をかけてくださいますし、授業を欠席して次に会うと、こないだ来てへんかったな、どないしたんや、と気にかけて下さいました。

また、「昨日はほとんど寝てないんや、しんどいわ」などと、全然しんどくなさそうにおっしゃられるので、本当に寝てないんだろかと疑いを持ったこともあります。要するにとても親しみの持ちやすい素敵な女性ということですよ。

授業が今日で終わってしまうだけでなく、先生は今年度をもって退職されるということで、キャンパス内を歩いていて会うことすらなくなるのかと思うとすごく寂しいですし、本当に残念でなりません。短い間でしたが先生の授業を受けることができ本当に楽しかったです。そして、先生の教え子の一人になれたことを誇りに思います。これからも優しい笑顔で、元気ががんばってください。先生ありがとう。

花束を渡そうと、みんなが立ちはじめ。

「ごめん。ついでにこれ（先刻の課題の解答）もってきて。（笑い）」

ひとりひとりから花束をいただく。（BGM）Auld Lang Syne の曲。

事務長の声に促されて、参加者のみなさんから花束をいただく。

事務長

「では、最後に、あの、吉田先生に一言いただいて、最終講義のほう終りにしたいと思います」

「ほんとうにどうも有難うございました。先程も申しましたように、ほんとにこんなんでいいのかな。皆さんにこんなしていただくようなことを（わたしは）やったのかな、という思いですけど、今ね、少し、湿っぽい感じが中（と胸のあたりを指して）にあるんですけど、今ね、＜解放されるのや、解放されるのや＞と、そんなことばかり思ってるんですけどね、多分、ほんとにね、辞めちゃったら何が出てくるんかな、と思いますね。ほんと今日来てくださった方 - いや来てくださらない方もなんですけれど - 有難うございました。嬉しいです。あのここに居りませんが、あの、地球の上には居りますので、ぜひともあと、お付き合いのほど、よろしく願いいたします。ありがとうございました。（お辞儀）（拍手）学部長ありがとうございました。」

事務長

「え、皆さん、ご出席ありがとうございました。以上をもちまして、吉田先生の最終講義を終わらせていただきます。ありがとうございました。」

追記：3 F クラス受講者（出席簿順）

長谷川朋広， 伊藤 智香， 金子 広実， 中村 昌人， 萩 和憲， 森 万希子，
村瀬可南子， 足立 優子， 池田 彰， 伊藤 修平， 斉藤 由香， 柴田 亮，
坪井 慎吾， 中尾 美希， 光岡 翼， 来海 康雄， 谷掛 舞， 服部 恵美，
松田 圭永， 松村明日香， 大嘉田剛史， 奥野 雄亮， 杉本 騰寿， 遠藤 大樹，
澤井千恵子 (以上 25名)

よしだ まさこ
吉田 昌子教授 略歴と業績

略 歴

1935年6月29日	京都府京都市に生まれる。
1954年3月	京都女子高等学校文化コース卒業
1958年3月	立命館大学文学部文学科英米文学専攻卒業
1958年4月	立命館大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程入学
1961年3月	立命館大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了，文学修士
1961年4月	大阪市立都島中学校英語教諭に就任
1967年3月	大阪市立都島中学校英語教諭退職
1967年4月	立命館大学文学部助手に就任
1971年4月	立命館大学産業社会学部助教授に就任
1979年4月	立命館大学産業社会学部教授に就任
2001年3月31日	学校法人立命館定年退職
2001年4月1日	立命館大学名誉教授

立命館大学学内歴

1978年4月～1979年3月	産業社会学部学生主事
1984年4月～1985年3月	二部教務主任
1987年4月～1988年3月	外国語科連絡協議会委員長
1988年9月～1990年3月	国際センター副所長
その他，入試主査，副査。	

学会等

日本英文学会，日本ロレンス協会，立命館英米文学会（前会計監査，現在評議員），現代英語文学研究会

研究業績

著 書

- 1．共著 『ロレンス研究NO.3 息子と恋人論集』（第5章「闇の世界への旅立ち - モレル夫人の死が意味するもの - 」，ロレンス研究会紀要，1975年7月，朝日出版社，1980年7月）
- 2．共著 『ロレンス研究 虹』（第5章「『虹』における闇」，朝日出版社，1977年7月）
- 3．共著 『ロレンス研究 恋する女たち』（Women in Loveの解説つき文献一覧（～），朝日出版社，1979年10月）

論文

1. 単著 「ヴァージニア・ウルフ試論（上） - その人生像と意識の世界について - 」(『立命館文学』第202号, 1962年4月)
2. 単著 「ヴァージニア・ウルフ試論（下） - その人生像と意識の世界について - 」(『立命館文学』第203号, 1962年5月)
3. 単著 「燈台の多様性 - ヴァージニア・ウルフの小説における素材について - 」(『立命館文学』第301号, 1962年5月)
4. 単著 「ジェイコブの影 - ヴァージニア・ウルフ論 - 」(『立命館英米文学』第5号, 立命館大学英米文学紀要, 1967年1月)
5. 単著 「『白孔雀』におけるAMBIVALENCEの問題」(『ロレンス研究 白孔雀論集』の第3章, ロレンス研究会紀要, 1973年4月)
6. 単著 「E. M. フォスターと『自由』 - “Three Anti-Nazi Broadcasts”を中心に - 」(『立命館産業社会論集』第11号, 1974年7月)
7. 単著 「“Life”観とその20世紀的特徴 - E. M. フォスター, V. ウルフ, D. H. ロレンスの場合 - 」(『立命館法学』別冊, 1992年3月)
8. 単著 「D. H. Lawrence 中期短編小説における望郷意識 - “England, My England”と“The Blind Man” - について」(『立命館産業社会論集』第76号, 1993年6月)

翻訳

1. 共訳 「東イングランド」「ミッドランドとコッツウォルズ」(『英国読本 紅茶の時間に - 作家や詩人の愛した町や村 - 』, 文理閣, 2000年8月)

学会報告等

1. シンポジウム 「The Rainbowの構造と暗闇の世界」(日本ロレンス協会第7回全国大会, 1976年5月)
2. シンポジウム 「ロレンスの望郷意識と"touch"について」(日本ロレンス協会第23回全国大会, 1992年5月)
3. シンポジウム「文学と英語教育」(現代英語文学研究会) 1997. 8

その他の報告・活動

1. 単著 「京都に暮らす外国人女性と『日本語で国際交流講座』」(『京都地域研究』NO. 3, 立命館大学人文科学研究所, 1988年3月)
2. 単著 「『日本の女性』を語る - 第25回オカナガン外国事情会議報告 - 」(『立命館言語文化研究』第1巻第1号, 1989年12月)
3. 単著 「私の英文学研究事情」(『立命館英米文学』, 2001年3月)
4. 研究報告 「チャタレー夫人の生き方の現代的意義」(現代英語文学研究会) 1999

5. 研究報告 「オックスフォードの知識人たち」(立命館大学言語文化研究所課題別研究会)
1999
6. その他(調査報告) A Checklist of Works by and about D. H. Lawrence, 1991-1996, in
Japan ("D. H. Lawrence Review" Vol. 28 Nos. 1-2 The University of Texas at Austin)
1999.秋

教育実績

1. 学部教育実績
担当科目「英語」
2. 一般教材 Essays and Short Stories of Virginia Woolf 「ヴァージニア・ウルフ小品集」(青山書店1968.4)
3. 学部「統一テキスト」作成(1973年から1991年まで)
4. 二部通常クラスにおけるビデオ学習の報告 単著 『立命館大学外国文学研究』(82号)
1988.10
5. 60-word English Mini Essay 実践の報告 - 英語の表現力をつける授業を目指して - 単著
『立命館大学産業社会論集』(第76号)1997.6
6. 外国語科連絡協議会委員長として教学改革に参画 立命館大学 1986.4.1 ~ 1987.3.31
7. 二部(夜間)通常クラスにおけるビデオ学習の実践 立命館大学 1987.4.1 ~ 1988.3.31
8. 国際センター副所長として海外研修(特に、本務校での外国人学生の研修プログラム)の企画, 実施に参加 立命館大学 1988.9.1 ~ 1990.3.31
9. 日本語で話す国際交流講座「日本に暮らして」 - 外国女性の体験と意見 - で, コーディネーターを務める 立命館大学末川市民セミナー 5回講座 1987.5.13 ~ 7.15
10. 立命館大学産業社会学部創立30周年記念行事として学生を交えた「アジアの文化祭典」を企画, コーディネーターを務める 立命館大学 1994.11.3
11. 「世界学生平和サミット」で第11分科会アドバイザーを務める 立命館大学 1995.12.4 ~ 6
12. 「世界学生平和サミット」記録ビデオ英語版の監修を行う 立命館大学 1996.2
13. 外国語教育改革推進委員会委員として改革原案を作成 立命館大学 1996.3.1 ~ 7.31
14. 外国語教育センター英語部会部会長として, 新カリキュラムの準備に取り掛かる 立命館大学 1995.4.1 ~ 1996.3.31
15. 英語で表現力つけるための授業実践 立命館大学 1996.4.1 ~ 1997.3.31
16. 新カリキュラムによる1回生の学習成果としてパラグラフ・ライティング文集を作成
 - その1 立命館大学 1999.3.25
 - その2 立命館大学 2000.1.30
 - その3 立命館大学 2001.1.9